PEOPLE TOWN LIFE ひと まち くらし

牛とともに

5年に1度開催される、全国規模の和牛の品評会、全国和牛能力共進会。通称「全共」、別名「和牛のオリンピック」ともいわれる大会が、今秋、宮城県で開催されました。

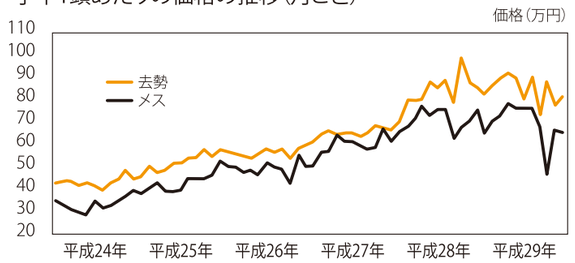
今回は、本町からの出品は叶いませんでしたが、6月29日、島根中央家畜市場（松江市宍道町）で開催された県の代表牛選抜会には、本町から4頭を出品し、町内の畜産農家や和牛改良組合、JA、行政などが一丸となって取り組みました。今月は、『畜産農家の今』を特集します。

「半減」した畜産農家数

町合併直後、平成17年に実施された農林業センサスによると、本町の乳用牛と肉用牛の飼育農家数は141戸（平成17年2月1日現在）（内訳：乳22戸、肉119戸）。県が毎年実施する調査で近年の推移を見ると、平成25年には63戸でしたが、平成29年には52戸に減少しています（表参照）。まさに〝半減〟といえるほどです。

畜産農家減少の原因としてあげられるのが、農家の高齢化。毎日の仕事で労力もかかる、体が追いつかないということから、飼育を断念するということが多くあるようです。また、子牛価格の低かった平成20年代前半に、多くの農家が飼育をやめたことも大きな要因です（グラフ参照）。

子牛1頭あたりの価格の推移（月ごと）



町内の畜産農家数と牛の飼育頭数の推移

種別 ＼ 年		平成25年	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年
畜産農家数（戸）	繁殖農家	55	55	48	44	44
	酪農家	8	8	8	8	8
飼育頭数（頭）	肉用牛	372	374	354	330	335
	乳用牛	982	928	1,053	1,065	1,034

※値は各年の2月1日現在（例：平成25年は平成25年2月1日の値）

今、町では、エコ米、バイオマスなど、農業、林業、畜産業をつなげた循環型農業の取り組みを進めています。いずれの産業も畜産の振興、堆肥の活用が鍵となっています。

全共に出られるのはほんの一握りですが、単なる一過性のお祭ではなく、町全体の飼育技術の向上、産業の活性化に繋げられればと考えています。

『島根和牛の本場』を作り上げてきたベテランの技術が、若い力に確かに継承され、畜産を盛り上げていこうとしています。

松原健吾さん

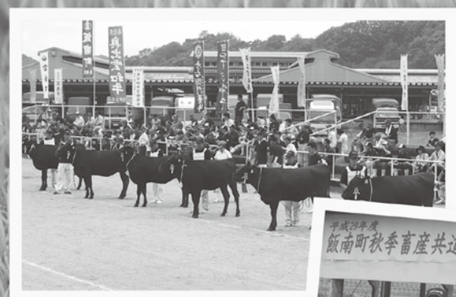
毛の硬いたわしを使って毛を手入れする松原さん

町合併直後の平成17年に、畜産を始めた方がいます。松原健吾さん（36）は、町が平成17年に塩谷に整備したリース牛舎で、親牛37頭、子牛約20頭を飼育しています。松原さんは、母親の実家で牛を飼っていたこともあり、子どもの頃から牛の世話の手伝いをしていて、

「子どもだけぇ、牛にさわれるか、さわれないかという時だった。その頃から楽しいなと思っていた」と話します。

高校は出雲農林、大学は長野県で畜産を学び、大学卒業後にUターン。頓原肥育センターで数年就業後、今の牛舎で畜産を営んでいます。

「えさは朝7時と、夕方5時から日に2回、約2時間かけて牛が食べるペースにあわせてやっている。昔からこうしてきたので、時間になったら牛も鳴いたりするけぇ、かわいい。日中は、牛舎の掃除や草刈り、今の時期ならワラ採りなんかをしている」


6月29日、全共の県代表牛選抜会に出場（写真は第7区の出品牛）

全共、飼育技術向上のきっかけに

6月29日に開催された第11回全国和牛能力共進会島根県代表牛選抜会には、松原さんも出品しました。

「今回、飯石和牛育種組合で出品し、飯南町・雲南市の職員の方々にも手伝っていただき、どうしても宮城に行きたいと思っていたので残念、次回も頑張りたい。全共に向けての取り組みは、手間もかかるけど、飼育技術の向上にもつながる。加えて、全共に出場すれば、飯南町の名前が全国に広がる。『牛どころ』という地域をアピールできる大切な機会」と話されます。

松原さんに「畜産農家が増えるには？」と聞くと、

「子どもが、牛と触れ合える機会があるといいと思う。県内には、町主催の共進会に小学生が審査員として参加する町もある。また、農家が集う機会が少なくなっている。畜産は、地域全体、町全体で守っていかないといけない。こういった機会は大切。自身の経営も大切だが、飯南町の牛を維持し続けるということが一番の使命。Gyu・牛会で町内の畜産を盛り上げながら、『飯南町の牛ここにあり』ということを全国に伝えたい」

9月1日、町秋季畜産共進会で講評をする小林さん

小林健宣さん

畜産に熱いまち

「飯南町は『島根和牛の本場』。畜産に熱い人たちがいて、和牛改良組合を中心に、まとまりのあるまち」と話すのは小林健宣さん。自身も畜産農家で、全国和牛登録協会島根県支部副支部長を務め、牛の登録や全共出品の際の審査員もされています。

「ここは、JAや和牛改良組合、行政のバックアップが手厚い。受精についてはほとんどをJAが受け持っていて、とてもきめ細やか。地元に獣医の先生もおられる」

畜産の未来は若者の力がカギ

小林さんは、これからの町の畜産振興のカギとなるのは「Gyu・牛会」など若い力だと話します。

畜産に携わりたいという人は、潜在的にはすごくたくさんいるという。しかし、新しく始めようと思うと、施設整備に多額の費用がかかり、牛が売れるようになるまでの約1年半、収入はほぼないとなると難しい。理想と現実がかけ離れていて、すぐやめる人も多い。やはり、今ある技術を継承し、伸ばしていくことが大切になってきます。

Gyu・牛会（会長　松原健吾さん）は、和牛飼育技術の研鑽の場として、町内の畜産振興を目的に、平成22年12月に結成された団体。若い力で町の畜産を盛り上げようと、町内で畜産に携わる若者が所属しています。県内に、同様の若者が集まる団体はほかにありません。

「5年後の全共で、今度は俺たちが、牛を自ら飼って、自分で綱を引いて出品する。切磋琢磨するというところまでは、まだ至っていないかもしれないが、後継者としていずれは親父に代わってという形、下地はできている。全共だけでなくて、畜産全体を盛り上げる。『牛飼いは俺達にまかせろ』という気概で頑張ってほしい。

畜産農家を増やすということは、現実的には難しいかもしれない。個人では全共はよう出んけど、周りの支援があれば、やってもいいという人はいる。そういったところを、若い力や地域、行政がしっかりとバックアップすれば盛り上がる。雲南畜産総合センターが研修施設的な役割を果たすことも必要だと思う」と熱く語られた。